現代社会における読書活動

山口　桃子
（岡本裕介ゼミ）

現代の日本では，余暇を過ごす手段として，テレビやコンピューター・ゲームといった娯楽が急激に普及した。それにともない，読書離れが問題として挙げられるようになった。読書離れ，活字離れが原因で読解力が低下したのではないかという説がある。理科や数学といった問題を解答するときにも，その問題文を読んで解答する必要がある。つまり，その問題に対する読解ができていなければ，学力低下は免れない。

学校では，読み書き計算といった単なる詰め込み教育だけでなく，総合的な学習の取り入れのように，生徒たちに発展的に調べ，学ばせる機会が重要視されている。そのため，生徒が情報を能動的に調べる手段として書物が注目され，図書およびそのほかの資料を収集・整理・保管する場所として学校図書館のあり方が問われるようになった。そこで，読書活動が重要視される社会情勢や学校図書館について調査し，現代社会における読書活動について考察したい。

1．「読解力」の低下問題

現代日本では子どもの読書離れ・活字離れが指摘されている。このことを示す調査の例として，2003年７月にOECD（経済協力開発機構）が実施したPISA調査（生徒の学習到達度調査）があげられる。PISA調査では「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」「問題解決能力」が行われたが，その結果（2006年12月公表）によれば，日本の子どもたちの学力は，「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」「問題解決能力」の得点については，いずれも１位の国とは統計上の差はなかった。その一方で，文章を読み取る「読解力」の得点結果順位が2000年に８位であったものが，2003年では14位となり，そのことが学力低下論とともに「読解力」の低下問題として取り上げられるようになった。

PISAの2000年調査国際結果の要約において，読解力とは，「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力」であると定義されている。また，生徒の背景と到達度を見ると，「趣味で読書をすることはない」と回答した生徒と，「毎日１時間以上２時間未満読書をする」と回答した生徒の総合読解力の得点は，日本が27点であるのに対し，オーストラリアは92点，ドイツ84点，フィンランド79点，カナダ77点，ニュージーランド76点と，他国の得点と比較した際も，得点差が甚だ大きい。

日本の生徒は，「毎日趣味として読書をしているか」という質問に対し，55パーセントの生徒が趣味で読書はしないと回答している。OECD平均の32パーセントよりも読書を趣味としていない生徒が多く，参加国の中で最も高い割合を示している。

文部科学省は，これまで日本の学力を世界のトップ水準としてきたが，今回の調査結果から読解力の低下があることを認め，落胆の意をあらわした。それとともに，読解力に重きを置き，読解力向上のためのプログラムを作成することを明らかにした。

読書を日常的にしていないとすれば，週に２回の休日はどのようなことに割り当てられているのか。学校外の時間をどのように過ごしているかということについて，国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2003；国際教育到達度評価学会（IEA）実施）に，「学校外での時間の過ごし方」という質問がある。「宿題をする」「テレビやビデオを見る」「家の手伝いをする」という選択肢のうち，「宿題をする」についての国際平均は１日あたり1.7時間なのに対して，日本の中学校は１日あたり1.0時間である。「テレビやビデオを見る」についての国際平均は１日あたり1.9時間であるのに

対し，日本は1日あたり2.7時間である。同様に，「家の手伝いをする」という質問についての国際平均は１日あたり1.3時間であるのに対し，１日あたり0.6時間である。この結果を受けて，文部科学省は，テレビやビデオを見る時間が長く，家の手伝いをする時間が短いことや，学ぶ意欲や学習習慣に課題があることを問題点として挙げている。週休二日制によって，土曜日にできた余暇の時間に勉強をするわけではなく，テレビやビデオを見るといった娯楽に使われていることは，学習習慣の問題とも関わってくる。

２．読書の現状

インターネットにウェブログ（ブログ）やオンラインゲーム，チャットなどが登場した。一概に文字を読む機会が減少しているとは言い難い。ウェブログ等に飛び交っている「話し言葉」，いわゆる軽い言葉を読む機会は増えているようであるが，「書き言葉」を読む機会が減り，構成されている文章を読むことが億劫・難儀になっている可能性がある。「話し言葉」は，本来の言葉や漢字を簡略化しているため，その元となる意味をとらえることは容易ではない。

幼い時期から書籍をたくさん読んでいると，子どもの国語力・読解力は自ずと向上するといえる。ところが，名著の筋書きを端折ったような国語の教科書だけでは，十分な読書活動が満たされているとは言い切れない。また，読書活動は国語力・読解力の向上だけではなく，読書をすることによって，読解力が高まり，視野が広まることにもつながる。その他にも，目的に応じて的確に読み取る能力，その場に応じて適切に表現する力，文章の叙述の仕方などについて，自分なりの意見を持つようになり，情緒が豊かになることにもつながる。

インターネットに目を向けてみると，インターネットの普及によって，匿名で感情表出ができる時代となった。書籍にするには，それなりの言葉が取捨選択され形にされる。一冊の書籍は，いわば，ひとつの作品であるといえる。しかし，インターネットでは，言葉がふるいにかけられることはなく，そのままの状態で配信される。たとえば，「馬鹿」や「死ね」などの言葉も，簡単に配信されてしまう。このような事態は情報の電子化が普及した現代において防ぎとめることはできない。インターネットが原因と考えられる事件に対して，「伝え合う力」の育成が強調されている。「伝え合う力」は，国語科の目標に表記されており，国語科における指導では主眼となっている相互のコミュニケーション能力をはぐくむことが「伝え合う力」を養ううえで重要視される。「伝え合う力」においてまず大切とされるのは，「聞く」「話す」「読む」「書く」である。学校では，言語の理解力，表現力の育成にあわせてコミュニケーション能力を増やすとともに，とくに道徳の指導内容の他の人とのかかわりという視点に示される道徳的価値がはぐくまれるような取り組みが注目される。そこで，多様な読書活動や言語表現活動を日常的に行うことが望まれる。（『最新教育基本用語　全面改訂版』）

３．読書週間

読書活動が社会的に重要視されるようになったのは，今に始まったことではない。その証ともいえるのが，「読書週間」の存在である。

「読書週間」というのは，読書習慣の普及と読書生活の向上をはかるために定められた10月27日から11月９日までの２週間の期間である。この読書週間の始まりは，終戦間もない1947年で，「新生日本を文化国家に」という目的のもとに，11月17日から11月23日までの１週間が第１回目の「読書週間」として設定された。

読書週間が実施されるにあたっては，一般の人たちの読書意欲の高さから，出版社・図書館・取次・書店・報道・文化など，関連する約30の団体が読書週間実行委員会を結成し，読書週間を設定した。その翌年に第2回目の読書週間が開催された。このときから，読書週間の期間が10月27日から11月９日と定められた。この期間は11月３日の文化の日が中心として設定されている。また，読書週間が始まる10月27日は「文字・活字文化の日」に制定されている。

「読書週間」が定着するにあたって，委員会というかたちではなく，年間を通して読書活動を推進していく機関が必要であると考えられ，1959年11月から読書週間実行委員会の仕事を受け継いで，社団法人「読書推進運動協議会」（読進協）が活

動を開始した。

読進協は読書週間のほかにもさまざまな活動をしている。1959年に読進協は「こどもの読書週間」を開催した。これは，IBBY（国際児童図書評議会）がアンデルセンの誕生日にちなみ，４月２日を「国際子ども本の日」と定めたことが影響している。これにともない，日本で2001年12月「子ども読書活動推進法」が公布・施行され，４月23日が「子ども読書の日」に制定された。

読書活動を公共に広める活動として，「若い人に贈る読書のすすめ」というリーフレット（宣伝・広告や案内・説明などのための，一枚刷りの印刷物）を制作して公共図書館や書店などに配置している（ちなみに，このリーフレットは京都学園大学にも置かれている）。内容は，書物の紹介で，各都道府県の読進協に，この１年に出版された書物の中から「若い人にぜひ読んでもらいたい本」を3冊推薦してもらい，その推薦書をもとに読進協の事業委員会で24冊の書目を選定してリーフレットを作成している。

このように，読進協は読書週間やこどもの読書週間など，読書活動を推進させるための催しや活動を行っている。

４．出版の統計と流行

書籍の年間販売実績は1996年をピークに長期低落傾向が続いているが，『ハリー・ポッター』シリーズ（静山社）の新刊が出た2002年，2004年，2006年が前年を上回り，出なかった年がその反動で沈むというパターンにより，大きく上下する傾向が強まっている。その一方，2003年に『バカの壁』（新潮社）が大ヒットして以来，教養新書にヒットが続出した。教養新書ヒットの背景には，DSソフト（任天堂が開発・販売している携帯型ゲーム機ニンテンドーDSのソフト）の百マス計算，脳トレーニング，テレビによるクイズ番組など，教養ブームともいえるような教養への強い関心，新書という低価格でコンパクトサイズであるという要因がある。また，教養ブームで話題になった作品に『ドラゴン桜』（講談社の漫画雑誌『モーニング』2003年～2007年連載）がある。『ドラゴン桜』は，弁護士の主人公が高校生を東大へ合格させるためにレクチャーをするという物語であるが，さまざまな受験テクニックや効率のよい勉強法が紹介され，ドラマ化やDSソフト化といったことから，教養ブームに拍車をかけた。この『ドラゴン桜』が連載されていた2007年は，教養新書や文庫，ケータイ小説といった低価格商品が売れ，販売部数では前年並みを保ったが販売金額は前年を下回った。（『2008年出版指標年報』）

『ハリー・ポッター』シリーズは，映画を観て，書籍を購入して読む読者がいる一方，ブームや話題性に乗って読み出した読者も多くいる。また，『バカの壁』についても，作者の養老孟司は，それまでにも著書を出していたにもかかわらず，ベストセラーになったこともなく世間からの認知度は高くなかった。だが，『バカの壁』がヒットすると，売れているという理由で書店に購入しに行ったり，図書館に行って手に取ったりする人が非常に増えた。また，本書は400万部を超えるベストセラーとなり，同年の新語・流行語大賞，毎日出版文化賞特別賞を受賞した。それだけにとどまらず，『バカの壁』の続編ともいえる『死の壁』や『超バカの壁』などといった『バカの壁』シリーズも続々と売れ行きを伸ばしている。この背景には，話題のものや流行のものに飛びつくという消費者の行動がまざまざとあらわれているようだ。このような消費者の行動は，多くの書物とふれあうよりも，話題性やヒット商品，映画化やドラマ化といった，何か手に取るきっかけのようなものがなければ読む気持ちが湧きづらいように見受けられる。

５．「本離れ・活字離れ」

現代は「本離れ・活字離れ」という言葉が注目されているが，人々は本当に本や活字から遠ざかっているのだろうか。

出版科学研究所が発表している出版物推定販売金額を見てみよう（『2008年出版指標年報』）。出版市場規模を表す出版物推定販売金額は，1996年の２兆6564億円をピークに右肩下がりの状態にあるのが現状である。しかし，これは主に取次ルートを通って新刊書店で販売された出版物の推定販売金額である。そのため，公共図書館や学校図書館の利用数や読者の数は含まれていない。

毎日新聞社が2007年10月末に発表した「第61回

読書世論調査」によると，2007年の総合読書率は，昨年より３ポイント増えて75％だった。この総合読書率は1956年からおよそ70～75％の間で推移しており，この50年間大幅に下がったということはない。

年齢別に見てみると10代後半～40代で８割を超え，最も高い10代後半は89％で，昨年よりも３ポイント増えている。70代以上は55％と最も低いが，昨年より５ポイント増えた。「読まない」は昨年より２ポイント減の22％である。

書籍に限ると「読む」人は49％，週刊誌は46％で，ともに昨年比３ポイントの増加。月刊誌は45％（昨年比１ポイント増）だが，「読まない」の44％をわずかに上回った。1965年以降はおよそ45～55％で推移しており，約半数の人が書籍を読んでいるということになる。月刊誌で「読む」が「読まない」より高い数字となったのは01年調査以来6年ぶりである。１日に書籍や雑誌を読む平均時間は，昨年より５分増え53分となり，50分台を維持していた一昨年のレベル（52分）に戻った。

書籍の読書率はその年のヒット作に大きく左右される面があり『チーズはどこへ消えた？』『話を聞かない男，地図が読めない女』『ハリー・ポッター』シリーズなどが大ヒットした2001年には，60％近くにまで伸びている。前章の『バカの壁』シリーズの流行からも言えるように，本をあまり読まない人でも，巷間で人気が出たりたりヒットしたりすると，話題性からその作品を手に取って購入するため，書籍の読書率は上がる。

この調査をもとにすると，一概に本離れ・活字離れであるとは言えないことが読み取れるだろう。

６．読書の社会への影響

本を読むことによって，読者が作品に感銘を受けることはあるが，それが大多数の人々となると，無視できない問題となる。本が社会を動かした現象として，漫画の流行を例に挙げてみよう。

漫画『SLAM DUNK』は，井上雄彦が描いた高校バスケットボールを題材として，『週刊少年ジャンプ』（集英社）に1990年から1996年までの６年間にわたって掲載された作品であるが，『SLAM DUNK』に感化されてバスケットを始めた人がたくさんいるほど，この作品は社会に影響を及ぼした。また，漫画が流行したことによって，そこで扱われている物事に関心を向ける人が多いのは，漫画『ヒカルの碁』（『週刊少年ジャンプ』に1998年12月から2003年まで連載された，囲碁を題材にした少年漫画）がヒットしたために，以前まで存在すら希薄だった囲碁がブームになるというような出来事によっても証明できる。これは，もはや社会現象といえるだろう。

つまり，社会的現象となりうるほどに作品自体の影響力が高いということは，逆に社会的に悪影響を及ぼすような作品がヒットすれば，問題行動が流布しかねないと社会の側は考えるだろう。携帯小説は，携帯電話を片手に，誰でも小説を作って配信することができるので，手軽だというメリットもあるが，稚拙な文章も簡単に配信・公開されてしまうということも起こる。また，携帯小説は，人の死や病気，妊娠やレイプなどを作品テーマとして被害者目線から取り上げていて，実際のレイプ被害者や癌患者から批判的な意見が出ている例もあるが，人が創作した物語に対して何らかの考えや感情を見出すことは重要である。作品に対して，単に面白いとか感動したという感想をもつだけで終わらず，登場人物が人生を真剣に生きている姿に関心を持ち，感動するということは，情緒豊かな心をはぐくむ物語として評価する価値がある。読者が本を読むことを通して目標が生まれるなら読むに越したことは無いが，もし書物の選択を誤ってしまったならば，それは甚だしく危険であると社会は見なす。そこで，生徒が「良書」を選択するためのサポートをするのが，学校図書館の役割のひとつである。

書物が出版されるにあたっては，携帯小説のように個人の独断で配信されるわけではなく，出版側に複数の人が携わるわけであるが，読む書物の内容や質も考慮して選択しなければならない。

７．規定に見る学校図書館

前章では，社会から見ると良書の選択をサポートするのが学校図書館の役割であると述べたが，学校図書館は学習指導要領においてどのように位置づけられているだろうか。小学校学習指導要領において，次のように定義されている。

第１章　総則
第５　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項
２　（９）学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り，児童の主体的，意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。

中学校指導要領においても，「第６　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」で，小学校学習指導要領と同等の文章で，専ら，生徒が学校図書館を利用し，意欲的な学習活動や読書活動を充実させることを目標として掲げている。また，児童生徒の主体的な学習や生きる力をはぐくむために，各教科において，学校図書館を計画的に利用した教育活動を展開することが学習指導要領には示されている。（平成10年12月文部省発表）

中教審（中央教育審議会）答申の「新しい時代を拓く心を育てるために」（1998年６月）において，読書は，豊かな感性や情操，そして思いやりの心をはぐくむ上で大切な営みであるとして，読書を促すことの重要性を提示している。すでに，毎朝「読書の時間」を設ける学校などもあるが，2001年12月に「子供の読書活動の推進に関する法律」が制定され，2003年４月より，12学級以上の小中学校に司書教諭が必要になったことで，心の教育における読書活動の位置づけはさらに大きくなっている。また，学校図書館と読書に関する全国的な研究団体に全国学校図書館協議会があり，学校図書館の充実発展と青少年読書の振興を図ることを目的とし，学校図書館の整備充実を図る運動（職員配置，予算増額，施設拡充など），学校図書館向け資料の選定と普及，学校図書館活用や読書推進に関する調査研究を行っている。そのほかにも，学校図書館の研究および学校図書館職員の資質向上を図る各種の研修も行い，学校図書館の学習・情報センター機能をより充実させようと活動している。

学校図書館職員の資質向上は，生徒の読書活動に大きな助力になる。齋藤孝は『読書力』において，「スポーツにコーチがいるように，読書にコーチがいてもおかしくはない。読書を好きとか嫌いとかいう以前に，どんな本を読んだらいいかわからないという人も多いのではないだろうか」と推測している。うまくその人の関心や能力にあった本が選ばれれば，そこから読書は楽しいと思うようになる可能性は高い。一般に初歩の段階では，面白い本のアドバイスはできるが，一般的な指導に加えて，その人の「癖」を理解したうえで行うワンポイントアドバイスも効果を持つといった点で，読書トレーナが必要であると述べている。

豊かな人間性を育むことが重要視される現代を生きるために学校図書館は規定されているが，意欲的な学習活動と生徒の読書活動を促すとともに，子どもが書物から言葉を学び，感性や語彙能力を高め，豊かな人間性をはぐくむために機能する機関としてより注目すべきであるといえるだろう。

８．学校図書館への期待と開閉時間

読売新聞社が行った読書世論調査「活字離れに歯止めをかけるための方法として効果的なものは何か」というアンケート（『読売新聞』2005年10月28日朝刊）によると，「『読書の時間』を学校の授業科目にする」が40％で最も多かった。次いで「読書への興味を持たせる教師を増やす」28％，「新聞を使った教育を充実させる」23％などが続いた。

「読書の時間」については，文部科学省の03年度の調査によると，朝の始業前や授業時間などを利用して読書した公立学校は，小学校88％，中学校74％，高校33％，となっている。朝の始業前や授業時間などを利用しての読書活動は，高校33％よりも小学校88％が断然多いが，低年齢から読書をすることに対して学校現場への期待が高まっていることがうかがえる。児童・生徒が書物を手に取るには，学校側の働きかけが必要である。

その一方，図書館の開館時間の短さも問われている。都道府県図書館の開館時間は，他の公共機関に比べ，非常に短い。日本図書館協会などの調べによると，都道府県図書館の平均閉館時間は月に６～７日であり，他館への本の提供や資料整理など，多くの業務をこなすだけの人間がいないため，閉館が月に数回のスポーツ施設などに比べると，休館になりがちなのである。（『読売新聞』2008年６月24日朝刊）

小中学校の学校図書館は，公共図書館以上に閉まっていることが多い。専任の司書教諭を十分に

確保できないため，わずかな時間しか開館できないのが現状である。学校側が司書教諭を置いているというのは名目だけで，教科担当や担任のクラス・部活の担当を同時に受け持っていて，学校図書館がその役割を果たしていないといった問題も実際にある。こうしたことが背景にあってか，大阪市教育委員会は，地域のボランティアの手を借りて，昼休みや放課後などに学校図書館の開館時間を増やす活動を始めた。このように，学校図書館の開館をうながす活動も見受けられるが，学校側が学校図書館を重要視し，生徒たちの図書館利用に働きかけている例もある。学校図書館が行っている読書推進活動の一例について次の章で述べよう。

9．学校図書館が行っている読書推進活動

児童・生徒が書物を手に取り読書に親しむためには，身近に設備や図書資料がそろっていることは勿論，利用を促すように読書推進活動をすることも必要である。大阪府豊能郡豊能町にある東能勢中学校の学校図書館が行っている読書推進活動は，利用案内や図書の新着情報などを印刷して配布したり，掲示したりといったように，生徒たちが自発的に図書館を利用するように創意工夫が行われている。また，それだけではなく，図書館や利用者の双方にとって利用しやすいように努めている。たとえば，図書全体の配置，貸し出し・返却をするカウンターの整理，新着図書の目に付きやすい場所への配置などである。図書の迅速な返本や目録順の正確な配列などの基本的なことにも力を入れることにより，必要な情報を調べるための図書や，興味関心のある分野の図書を手に取りやすくするいといったことにもつながる。それらの働きかけは，読書活動を推進させるために，より効果的であるといえるだろう。

東能勢中学校は，2007年５月より「朝の読書」に取り組んでいる。「朝の読書」は，月曜日から金曜日までの毎日８時30分から40分までの10分間行われる。読書の習慣化によって，考える力，理解する力の育成や，静かな朝を過ごし集中力を養うことなどを理想としている。そして，その読書の習慣を付けることは，集中力や達成感を養い，国語力の向上から学力向上へつながることをねらいとしている。

９月６日に生徒全員対象に朝の読書アンケートが実施された。「朝の読書を実施して，どう思っているか」というアンケートの「朝の読書をして良かったですか？」という問いに「はい」と答えた生徒は76.1％で，全校生徒の３／４はよかったと感じているという結果が出た。その理由は，「本を読む時間ができた」「本を読むことが楽しくなった」などの意見や「気持ちが落ち着く」「集中できる」「やる気が出る」「頭がさえる」などの意見も挙げられた。逆に23.4％の生徒が「いいえ」と答えている。読書が苦手な生徒にとっては，朝の10分間が漠然とした時間になる可能性も否定できない。しかし，読書を継続することにより，読解力が自ずと向上することにつながるだろう。そのほか，「朝の読書以外に読書の機会が増えましたか？」という質問に対し，「はい」と答えた生徒は，47.7％になっている。「いいえ」と答えた生徒もやや多く49.2％という調査結果が出た。「いいえ」と答えた生徒も多数いるが，半数近くの生徒が朝の読書以外の時間にも本に親しむ機会が増えたのは，朝の読書を実施した成果であるといえるだろう。

おわりに

現代の日本は，ネット社会である。ネット社会になって，多くの情報が行き交うようになったら，それだけ人々の教養が豊かになるとは必ずしも言い切れない。娯楽や快楽だけを目的にモニターの中の世界にふけってしまうと，そこから抜け出せなくなる。ネットゲームに夢中になり，日曜日や祝日だけでなく，毎日の深夜早朝のほとんどの時間をバーチャル世界に費やしている若者は，着実に増加している。食事すらもモニターの前で摂っているという人すらいるのである。

インターネットがこれだけ普及する以前は，社会にとって都合の悪い情報は，活字として伝達されるまでにふるい落とされていた。書物の場合，何人もの人の手を経て出版されているためである。しかし，インターネットではこうしたプロセスは必ずしも存在しない。社会によるコントロールを経ていない情報が流布する現代において，情報を取捨選択するための知識，知恵，直感が問われる。

人々がその能力を身につけるためには，学校図書館をはじめ，社会が読書活動を推進させることが不可欠である。うまく行けば，人々は自発的に読書活動をするようになるであろう。

参考文献リスト

橋本照美（編）・宮木立雄（発行），2003，『最新教育基本用語　全面改訂版』小学館.

日本公文教育研究会，2007，『教育を考える（特別編）　子育てを考える』日本公文教育研究会.

尾木直樹，2002，『「学力低下」をどうみるか』日本放送出版協会.

文部省初等中等教育局，1999，『変わる学校図書館　PART3』.

全国出版協会出版科学研究所，2008，『2008年出版指標年報』.

齋藤孝，2002，『読書力』岩波書店.

全国学校図書館協議会，2007，「全国学校図書館協議会」(http://www.j-sla.or.jp/, 2007.12.5.).

文部科学省，2007，「中央教育審議会」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm, 2007.12.5.).

文部科学省，2007，「新学習指導要領」((http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm, 2007.12.5)

文部科学省，2007，「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）《2000年調査国際結果の要約》」(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm, 2007.12.21.).

東能勢中学校，2007，「学校だより（平成18年度・平成19年度）」(http://www.ed.town.toyono.osaka.jp/index.cfm/11,2435,25,html, 2007.12.21.).

出版科学研究所，2008，「日本の出版統計」(http://www.ajpea.or.jp/statistics/statistics.html,2008.7.20.).

『諸君！』2005年12月号，文藝春秋.